

## 日本語ナラ条件節におけるモダリティの形式と機能

陳 訪 澤\* 徐 淑 丹\*\*

### The Modality Forms and Functions in Japanese NARA-Conditional Clause

CHEN Fangze\* XU Shudan\*\*

#### Abstract

This paper studied the modality forms and functions in Japanese conditional clause. Especially taking NARA-conditional clause as an example, it divided the modality into six types based on the modality system proposed in NKBK (2003). The result demonstrates that some forms of evaluation modality, cognition modality, explanation modality and politeness modality do appear in NARA-conditional clause. The findings also show that only some forms of cognition, explanation and politeness modality have modality functions.

**キーワード：**条件節、ナラ条件節、モダリティの形式、モダリティの機能

**Key words:** conditional clause, NARA-conditional clause, modality forms, modality functions

---

\*元本学客員研究員、広東外語外貿大学教授

\*\*広東外語外貿大学非常勤講師

連絡先：陳 訪澤 広東外語外貿大学

chenfangze@hotmail.com

## 1. はじめに

モダリティの研究は今まで主に単文を対象に行なわれてきた。そのため、複文のモダリティについて、特に従属節のモダリティについての研究はまだ少ないようである。筆者が見た範囲では、主節の研究において従属節のモダリティに言及したものに南不二男（1974）、野田尚史（1995）、仁田義雄（2000）、森山卓郎（2000）などがある。例えば、南不二男（1974）では従属節のガ節とシ節にモダリティが現れると指摘している。仁田義雄（2000）ではモダリティ形式の疑似性（つまり客観性）を、「疑い→確認→確信→推量→蓋然性判断→徴候性判断」の順に高くなると考え、文的度合（つまり独立性）の高い従属節（ガ節やカラ節）に現れると述べている。

本格的に従属節のモダリティを考察した研究もある。高山善行（1987）は時間節や仮定節などを対象に、寺村秀夫（1984）で取り上げた「概言のムード」の諸形式を考察したものである。山岡政紀（1995）ではモダリティを三つの類型に分けて、従属節における機能を考察している。しかし、これらの研究は不十分で、まだ課題が残っていると言わなければならない。

従って、本稿は従来の研究を踏まえ、従属節におけるモダリティの形式と機能を究明する試みとして、条件節の一つであるナラ条件節を取り上げることにする。以下では、日本語記述文法研究会（2003）のモダリティ体系と定義に準拠し、従属節のモダリティについても評価・認識・説明・表現類型・丁寧さ・伝達態度という六種類の枠組みで、議論を進めたい<sup>(1)</sup>。

## 2. 評価のモダリティの形式と機能

評価のモダリティとは、話し手が何らかの事態を述べ伝える時に、その事態に対する話し手の評価的な捉え方を表すものである。評価のモダリティは形式から、評価的複合形式、その他の複合形式と助動詞という三つに分けられるが、ここでは最も典型的な評価的複合形式を例として、「バイイ」、「タライイ」、「トイイ」、「テモイイ」、「ナクテモイイ」、「テハイケナイ」、「ナクテハイケナイ（ナケレバナラナイ）」などを検討する。

評価のモダリティは意味から、必要を表すもの（トイイ、バイイ、タライイ）、不必要を表すもの（ナクテモイイ）、許容を表すもの（テモイイ）、非許容を表すもの（テハイケナイ）という四種類に分けられ、さらに当該事態の制御可能性、実現状態、行為者の人称という三つのファクターのあり方によって、二次的意味を分化させる。当該事態が制御可能な場合、〈当為判断〉を表すが、さらにその事態が未実現で、かつ行為者が聞き手であれば、〈働きかけ〉となる。当該事態が非実現または既実現の場合、その事態が制御可能かどうかに関わらず、〈後悔〉〈不満〉の意味が生じる。

ナラ条件節においては、「バイイ」、「テモイイ」、「ナクテモイイ」、「テハイケナイ」、「ナケレバナラナイ」が現れる。

（1） 自衛隊が提供した燃料を米軍がイラク攻撃に転用してもいいなら、対イラク戦争に

参戦したことになるでしょう。

[www.geocities.com/ceasefire\\_anet/misc/jieikan\\_hagaki.doc](http://www.geocities.com/ceasefire_anet/misc/jieikan_hagaki.doc)

- (2) 必要に応じて指定し、指定しなくてもいいなら、そのまま「次へ (N)」ボタンを押します。  
[www2s.biglobe.ne.jp/~system/doc/msnet8.htm](http://www2s.biglobe.ne.jp/~system/doc/msnet8.htm)

- (3) まっすぐいけばいいなら案内は必要ないよ。  
[www.geocities.jp/guriko1975mk/taiwanshashin.htm](http://www.geocities.jp/guriko1975mk/taiwanshashin.htm)

- (4) 「私が成功してはいけないなら、いっそ失敗してしまおうか」  
(うん?) びっくりと顔を挙げたピーター君にサルボンは笑い返した。  
[nohira.s3.xrea.com/original/uniuni/mission6-2.htm](http://nohira.s3.xrea.com/original/uniuni/mission6-2.htm)

- (5) いかなければならないなら、まさしく戦闘地域に行くことになるのではないか。その意味では国会でも十分議論が尽くされておらず、なし崩しになっている。

(佐賀 2004.02.20 総合その他)

例(1)の場合は、「転用してもいい」だけでは制御可能な事態として扱われる。これで文が終わる場合、聞き手にその行為を許可する文として機能する。しかし、ナラ条件節に入ると、聞き手にその行為を許可するという機能がなくなっている。単なる客観的な事態を表すことになる。例(4)においては、「私が成功してはいけない」は不許可、つまり事態の実現が許されないことを表す。同じように、ナラ節においてはその不許可という聞き手に働く機能が失われている。評価のモダリティの形式は文末に来る場合と異なって、客観的な事態を表すことになり、モダリティの機能を表さない。

したがって、評価のモダリティの形式はナラ条件節においてすでにモダリティとしての機能を失っており、客観的な命題に変わっていると思われる。

### 3. 認識のモダリティの形式と機能

認識のモダリティとは事態に対する話し手の認識的な捉え方を表すものである。認識のモダリティの形式として、断定を表す「Φ」<sup>(2)</sup>、推量を表す「ダロウ」、蓋然性を表す「カモシレナイ」、必然性を表す「ニチガイナイ」、「ハズダ」、証拠性判断を表す「ミタイダ」、「ラシイ」、「ヨウダ」、「(シ) ソウダ」、「(スル) ソウダ」などがある。

高山善行(1987)は、寺村秀夫(1984)で「概言のムード」とされた「ダロウ」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「(シ)ソウダ」、「ヨウダ」、「ミタイダ」、「ラシイ」、「(スル)ソウダ」、「マイ」などについて考察している。結果として、「ヨウダ」と「(シ) ソウダ」は条件節に現れるが、その他の形式(「ダロウ」、「カモシレナイ」、「ハズダ」、「ミタイダ」など)は現れないということである。筆者も数多くの実例を集めて分析した結果、証拠性判断の「ヨウダ」と「(シ)ソウダ」はナラ条件節に頻繁に現れるが、それ以外の形式は現れないということがわかった。この結果は高山善行の考察と一致している。

「ヨウダ」がナラ条件節に現れる場合、「ようなら」の形になる。この場合、主節のモダリティは意志や叙述を表す場合が多い。

- (6) 政治目的のため野党の人物だけが起訴されるようなら、法に対する信頼が著しく損

なわれる。

(朝日 2000.01.16 朝6国際)

- (7) 「自分で立ち直れないようなら、産業再生機構に行ってもらおう」(省庁関係者)。

(佐賀 2003.06.01 経済)

- (8) 異常事態が続くようなら、何らかの措置を講じなければいけない」としている。

(佐賀 2003.05.21 スポーツ)

- (9) 品格が悪いようなら、(横綱から)降格させてもいいんじゃないかという意見もあった。

(佐賀 2003.01.28 スポーツ)

ナラ条件節はほとんど純粹の仮定を表すので、バ条件節、タラ条件節、ト条件節に比べ、話し手の心的態度が現れやすい。これらの用例における「ようなら」はその事態に対する話し手の把握、つまり話し手の心的態度を表すため、モダリティとしての条件を満たしている。

「(シ) ソウダ」がナラ条件節に現れる場合も同じである。「そうなら」の前には動詞も形容詞も来られるが、動詞が来ても節全体は状態を表すものである。

- (10) それでも、よく調べて実行ができそうなら譲る気持ちはあるからと約束してもらおう。

(佐賀 2003.05.13 ひろば)

- (11) 百歳の人の心は、百歳にならないと分からないというが、あんなに元気で楽しそうなら、百歳になってその気持ちを味わってみたい。

(佐賀 2003.01.06 ひろば)

- (12) 岡田氏も「取りあえず統一会派でやってみて、うまくいきそうなら合流するというのも選択肢だ」と述べ、5月6日にあらためて議論することにした。

(佐賀 2003.05.01 総合)

例(12)の場合、「(シ) ソウダ」は「うまくいく」という事態に対する把握を表す。つまり、そのようにいくと、その事態が発生するような状態になる。モダリティの形式がモダリティの機能を持つためには、三つの条件を備えなければならないと言われている。つまり、①否定しない、②過去ではない、③話し手の心的態度を表すという条件である。ナラ条件節に「(シ) ソウダ」が現れた場合、この三つの条件を満たしていると言える。従って、ナラ条件節における「(シ) ソウダ」はモダリティ機能を保っている。

では、ナラ節に「ヨウダ」、「(シ) ソウダ」以外のモダリティの形式が現れないのはなぜだろうか。まず、「ダロウ」から見てみよう。

森山卓郎(1992)では、「ダロウ」は「結論にまだ至っていない——判断を形成する過程にあることを表示する」と考え、「ダロウ」は推量という意味を固定的に持っているわけではなく、むしろ、結論を出さない述べ方をする(判断形成過程を表示する)という基本的意味が、条件によって、いわゆる推量の意味にもなりうるというような捉え方をするということになると述べている。「ダロウ」はまだ話し手の頭の中の判断に相当するものである。仮定は他のものを否定するに相当する。その仮定されるものは判断の確定が必要である。「ダロウ」はまだ話し手の頭の中の判断なので、確定されていないものと見なしてもいい。「ダロウ」はこのようにナラ節の性質と矛盾しているため、ナラ条件節に現れないと思われる。

次に、「ニチガイナイ」、「ミタイダ」、「ラシイダ」、「(スル) ソウダ」であるが、三原健一(1995)で判断確定性に関して分けたいくつかの段階を考えれば、「ニチガイナイ」は直感的確

定に属し、「ラシイ」は未確定近似に属し、「ミタイダ」と「(スル) ソウダ」は完全未確定に属している。これらのモダリティの形式がナラ条件節に現れないのは、判断確定性が弱いからである。「ニチガイナイ」は連体節には現れるが、ナラ条件節には現れない。

#### 4. 説明のモダリティの形式と機能

説明のモダリティとは、文と先行文脈との関係付けを表すものである。説明のモダリティの形式には、「ノダ」、「ワケダ」、「モノダ」、「コトダ」がある。

野田春美 (1997) では、「ノダ」をムードの「ノダ」とスコープの「ノダ」とに分けている。従属節の「ノダ」については、名詞に自然に後接できるかどうか、その従属節において助詞「は」が入りうるかどうか、という2つの基準によって、ムードの「ノダ」とスコープの「ノダ」とに判定される。名詞に自然に後接できる場合、あるいはその従属節に助詞「は」が入りうる場合は、ムードの「ノダ」になる。

(13) 日曜日にやるんなら、行くよ。 (野田春美 1997:149)

(14) \*日曜日なんなら、行くよ。

(15) 「君が行く」んなら、僕も行くよ。 (野田春美 1997:150)

(16) ?「君は行く」んなら、僕も行くよ。

例 (14) の場合、「ノダ」が名詞に後接したら非文になる。例 (16) も「は」が入ると不自然になる。従って、ナラ条件節に現れる「ノダ」はスコープの「ノダ」で、モダリティの機能がない。

「モノダ」、「ワケダ」、「コトダ」もナラ条件節に現れる。

(17) こんなに市場を混乱させることを覚悟しているわけなら新株発行でいいのではないのでしょうか? 焦土作戦をやるなどということはいったい、私には血迷っているとは思えません。 [yurikamome.exblog.jp/i3](http://yurikamome.exblog.jp/i3)

「ワケダ」は先行文脈からの論理的必然性のある帰結または結果を示すものである。この論理的帰結という意味が薄くなると、換言に近くなり、また、正当性や客観性を主張する意味合いだけが残る。例 (17) のナラ条件節にある「ワケダ」もその論理的必然性のある帰結と言えるであろう。従って、ここの「ワケダ」はモダリティの機能を持っている。

(18) 他人から否定されたぐらいで後悔することなら、初めからするな。

[utyuuno.hp.infoseek.co.jp/jitenn/02ko\\_ko.html](http://utyuuno.hp.infoseek.co.jp/jitenn/02ko_ko.html)

モダリティとしての「コトダ」は感嘆、推量、忠告などの用法がある。しかし、例 (18) にある「コトダ」はそういう用法ではない。「他人から否定されたぐらいで後悔する」を名詞化するものである。従って、ナラ条件節の「コトダ」はモダリティの機能を持たない。

(19) 引っこめられるようなものなら、もたないほうがマシです。「完璧な友だち」をなくしたといって泣かないこと。その人を二度と同じように見られなくなるものなら、いずれにしろ、その人にはどこかまちがったところがあったのです。

[www.kato-lab.net/words/words150.html](http://www.kato-lab.net/words/words150.html)

「モノダ」は一種の性質や傾向を表している。例 (19) の「モノダ」は前の「その人を二度

と同じように見られなくなる」ということについて一種の主観的な認識を表しているため、この「モノダ」はモダリティの機能が残っている。

要するに、説明のモダリティの「ノダ」、「ワケダ」、「コトダ」、「モノダ」はいずれもナラ条件節に現れるが、「ワケダ」と「モノダ」だけがモダリティの機能を持っているということがわかった。

## 5. 表現類型のモダリティの形式と機能

表現類型のモダリティは文の表し方に関わるもので、情報系と行為系に分かれる。情報系の叙述のモダリティと疑問のモダリティは文末に来るもので、ナラ条件節には現われない。行為系のモダリティは意志、勧誘、行為要求（命令）などに分けられる。意志のモダリティの形式は「シヨウ」が代表で、ナラ条件節には入れない。

(20) \* 出かけようなら、着替えなくてはならない。

勧誘のモダリティの形式は意志と同じく、「シヨウ」が代表なので、ナラ条件節には入れない。また、命令のモダリティの形式は「シロ」が代表である。動詞の命令形なので、言うまでもなくナラ条件節には入れない。

つまり、表現類型のモダリティの形式は基本的に文末に来るもので、従属節の中には現れない。

## 6. 丁寧さのモダリティの形式と機能

丁寧さのモダリティは聞き手や発話状況に応じたスタイルの選択に関わるモダリティである。丁寧さのモダリティは「マス」と「デス」という二つの形式で表される。「マス」と「デス」はいずれもナラ条件節に現れる。

(21) FAXでお申込の方はこちらをクリックして注文用紙をプリントアウトいただき上記宛お送りいただけますますなら幸いです。

[www5f.biglobe.ne.jp/~sangatushobo/chuumon.html](http://www5f.biglobe.ne.jp/~sangatushobo/chuumon.html)

(22) 少しでもお役に立てますなら、何よりです。[www.puni.net/cgi/tnote.cgi?book=annyo](http://www.puni.net/cgi/tnote.cgi?book=annyo)

(23) ご賛同いただけますますなら、記念品代金を会費と同様、期日までにお送り賜れますなら幸いです。

[www.ee.chubu.ac.jp/lab/TH/kanreki.html](http://www.ee.chubu.ac.jp/lab/TH/kanreki.html)

(24) そうそのくらいの大きさですなら全然問題ないですよ。

[mayweb.dion.jp/bluemap/syosinsya2/yybbs.cgi?page=120](http://mayweb.dion.jp/bluemap/syosinsya2/yybbs.cgi?page=120)

(25) あなたが、おかみさんの娘ですなら、今夜も、あの細い小魚を五六ぴき恵んで頂きたい。

[www.eonet.ne.jp/~log-inn/okamoto/karei.htm](http://www.eonet.ne.jp/~log-inn/okamoto/karei.htm)

これらの文のナラ条件節に現れる「マス」と「デス」はいずれも丁寧さを表しているのも、モダリティの機能を持っていると考えられる。

## 7. 伝達態度のモダリティの形式と機能

伝達態度のモダリティは、話し手が発話状況をどのように認識し、聞き手にどのように示そうとしているのかを表すものである。伝達態度のモダリティの形式は終助詞が代表である。野

田春美（2002）では、これらの終助詞を2種類に分けている。一つは話し手の判断を聞き手に主張する意味を表すもので、「ワ」、「ゾ」、「ゼ」、「サ」、「ヨ」などがそうである。もう一つは話し手の判断を示し、聞き手に最終的判断を委ねる意味を表すもので、「ネ（ナ）」、「ネエ（ナア）」などがそうである。この2種類の終助詞はいずれもナラ条件節に現れない。

(26) \*うまくいく（わ）なら、成功するはずである。

(27) \*雨だ（よ）なら、いかない。

## 8. まとめ

以上、ナラ条件節に現れるモダリティの形式と機能について考察したことをまとめれば、次のように結論することができる。

1. モダリティの形式に関しては、ナラ条件節に評価、認識、説明、丁寧さという四種類のモダリティの形式が現れる。表現類型と伝達態度のモダリティの形式は現れない。具体的に言えば、ナラ条件節に現れるのは、評価のモダリティが五形式、認識のモダリティが二形式、説明のモダリティが四形式、丁寧さのモダリティが二形式である。
2. モダリティの機能に関しては、評価のモダリティがナラ条件節に入ると、モダリティの機能を備えずに命題に変わるが、認識、説明、丁寧さのモダリティはそれぞれ2形式がモダリティの機能を持っている。

表にまとめると、次のようになる。

ナラ条件節に現れるモダリティの形式と機能の分布

モダリティの種類	評価							認識								説明				丁寧さ		表現類型	伝達態度			
	モダリティの形式	テモイイ	ナクテモイイ	テハイケナイ	ナクテハイケナイ	バイイ	タライイ	トイイ	ヨウダ	(シ) ソウダ	ハズダ	カモシレナイ	Φ	ダロウ	ニチガイナイ	ミタイダ	ラシイ	(スル) ソウダ	ノダ	コトダ	モノダ	ワケダ	マス	デス		
		○	○	○	○	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×
モダリティの機能		×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×

### 注

- (1) モダリティの種類については、日本語記述文法研究会（2003）では、文の伝達的な表し分けを表すもの（表現類型）、事態の捉え方を表すもの（評価・認識）、文と先行文脈との関係づけを表すもの（説明）、聞き手に対する伝え方を表すもの（丁寧さ・伝達態度）という四タイプ六種類のモダリティを区別している。なお、本稿で言う「モダリティの形式」は従属節に現れるもので、主節のモダリティに対応する形式を指す。
- (2) 「Φ」は無標の形式を指す。

## 参考文献

- 高山善行 (1987) 「従属節におけるムード形式の実態について」『日本語学』1987年12号, 明治書院
- 陳訪澤・徐淑丹 (2005) 「日本語条件節におけるモダリティの形式と機能——バ条件節を例として」『日語研究』(第3輯) 商務印書館
- 陳訪澤・徐淑丹 (2006) 「日本語のタラ条件節におけるモダリティの形式とコミュニケーション機能」『広東外語外貿大学学報』(第1期) 広東外語外貿大学
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」『モダリティ』(森山卓郎・仁田義雄著) 岩波書店
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部・モダリティ』くろしお出版
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 野田春美 (2002) 「終助詞の機能」『モダリティ』(宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃) くろしお出版
- 野田尚史 (1995) 「現場依存の視点と文脈依存の視点」『複文の研究(下)』(仁田義雄編) くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『複文』くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 三尾 砂 (1942) 『話し言葉の文法(言葉遣篇)』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 三原健一 (1995) 「概言のムード表現と連体修飾節」『複文の研究(下)』(仁田義雄編) くろしお出版
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ』くろしお出版
- 森山卓郎 (1992) 「日本語における『推量』をめぐって」『言語研究』第101号, 日本言語学会
- 森山卓郎 (2000) 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『モダリティ』(森山卓郎・仁田義雄著) 岩波書店
- 山岡政紀 (1995) 「従属節のモダリティ」『複文の研究(下)』(仁田義雄編) くろしお出版

[本研究は広東外語外貿大学外国言語学及び応用言語学研究センターに助成されたものである]

(原稿受理 2008年3月1日)